

甲南女子大学の女性教育の今後を考えるプロジェクト

これからの〈女性教育〉の話をしよう

NEWS LETTER

女子大学が社会的使命として応えるべき“女性のニーズ”とは？

女子大学の存在意義とは、端的に言えば「本気で女性を応援する“女性のための女子大学”」であることでしょう。その際重要なのは、女性を〈客体〉としてではなく〈主体〉とみなすこと、女性に対する社会のニーズの前に、社会に対して女性がもつニーズに応えようとすることです。

女子大学が、社会的使命として応えるべき女性のニーズとは何でしょうか？それは、単に女子高校生のマーケットニーズや、企業の労働力不足の穴埋めをする女性の人材育成(これは「女性のニーズ」というよりも産業界のニーズ)に応えることでしょうか。

そのことを考える上で見過ごせないことの一つに、いまだに解決されない日本のジェンダー不平等の問題があります。各国の男女格差を分析した「ジェンダーギャップ指数」(世界経済フォーラム 2019年)によれば、日本は世界153カ国中121位と過去最低を更新し、G7では今年も最下位、アジア主要国と比べても低いという惨憺たる状況です。女性が安心して、自信をもって、自由に生きられるようになるために、日本の女子大学の果たすべき役割はとてつもなく大きいのではないのでしょうか。

プロジェクト代表 学長補佐(女性教育担当) 野崎志帆



未来への実践力と女子大学

学長 森田勝昭

甲南女子学園は2020年に創設100周年を迎えます。1920(大正9)年は、人類初の世界大戦が終わり、人間の尊厳や自由といった考えが沸き起こった時代でした。学園はその時代に自由主義を掲げて女性のための教育活動を開始しました。それから100年がたち、巨大な社会変動の波が押し寄せる現代にあつて、あらためて女子大学には根源的な問いが突きつけられています。この困難な時代にこそ女子大学の存在意義があります。最も先鋭なかたちで社会の課題に曝されているからです。

ジェンダー格差が大きい日本社会では女性就業者数は増えているものの、非正規雇用率の高さ、管理職比率の低さが顕著です。経済、社会、文化など様々な領域で女子学生は格差と向き合い、自分の人生を切り開いていかなければなりません。人類のもうひとつの可能性(オルタナティブ)としての女性の能力開発教育を推進するために、本学では今秋、人間として、そして女性としてwell-being(より良き生き方、人生の希望など)を実現する「未来への実践力」という教育課題を提示しました。内部質保証委員会を中心として、この課題達成のための議論が進んでいるところです。本学は女性の力を育むことを目指しつつ、新たな女性教育システム構築に邁進します。



学生が安心・安全に大学生活を過ごせる環境を目指して

「女性のための学習生活環境向上を目指す会」メンバー(プロジェクト共同者・学生生活部長) 池田太臣



模型で説明する八木麻理子先生

昨年の6月から、人間科学部事務課の野呂課長代理を中心に「学生が安心・安全に大学生活をすごし学習に集中できるための環境づくり」が進められている。発端は、経血による座席の汚れが多発し問題化したことである。

具体的な取り組みとしては、2020年1月より、全コモンルームに衛生用品や着替え用の服、バスタオルなどを置き、必要な学生に貸し出す試みが始まった。同時に、そのことを知らせるポスターを女性トイレに掲示している。

また、人間科学部内の4学科のコモンルームでは、学生たちの抱える悩みや問題をさらに掘り起こすために、学生を対象にアンケート調査も実施された(2019/12/5～12/27)。

必要な学生サービスを充実させるのみならず、教育的な

試みも行われている。人間科学部事務課主催で、「女子大学だから身につく、生涯を生き抜く知恵を持とう」をテーマに、「第1回 女性のからだと健康」(講師：八木麻理子教授、合田文子保健センター主任)、および「第2回 性暴力被害者にならないために」(講師：友田尋子教授)という、全学生・教職員を対象にした2回のランチミーティングが行われた(2020年1月9日および16日。いずれも12:20-12:50、10号館2階プレゼンルームA・B)。

この動きは有志で進められてはいるものの、野崎志帆先生(学長補佐・女性教育担当)のご尽力により学長からもご理解をいただくことができた。加えて、教務課では「大学を知る」の授業内容に関連する内容を盛り込むことが、学生生活課では、学期開始時のオリエンテーションにて啓発用パンフレットを配布することが予定されている。活動の輪は、確実に広がりつつある。

こうした取り組みは、女子大学ならではのといえるだろう。「女性としての身体」を持つ学生たちが安心して学生生活を送れるように、また自分の身体を大切にすることができ、自立した女性として生きていけるように、全学的課題として今後とも教育・設備共に充実させて行く必要があるだろう。



友田尋子先生と聞き入る受講者



女性教育をめぐる参加者のボイス

2019年7月29日女性教育カリキュラム意見交換会に参加して下さった先生方の声をご紹介します



英語文化学科

ウオント 盛 香織

過去の女性たちの経験について新しい知識を与えると、学生は「びっくりした」まではいいのですが一時的な反応で、その気づきを次のアクションにつなげるような教育展開をどのようにするか試行錯誤し

ています。他の先生方の取組や葛藤を伺うことができ、悩んでいるのは自分だけではないのだな、みな手探りの中で学生へのベストを模索しているのだと知り、励まされました。この意見交換に、こうしたトピックに興味のない先生や、学生有志も入ると、面白いかもしれません。

多文化コミュニケーション学科

岩崎佳孝



女子大で教育に携わる「男性」教員の立ち位置について、よく考えます。男性の僕が女性を巡る事象を語るのと、女性の先生がそれを語るのでは、学生の受け止め方が違うのだろうか、学生が教員を「男性」と

「女性」で線引きしている可能性はないだろうか、と。教員のジェンダーは特に関係ないというご意見もあろうかと思いますが、僕はむしろ女子大で「男性」教員であるからこそできることを、見つけられたらいいなと思っています。



多文化コミュニケーション学科

林 雅彦

専業主婦希望者や「とりあえず就職するが子供ができたら絶対に働かない」という学生は意外と多い印象があります。配偶者にも何かあるかもしれないということも含め、「リスクは誰のところにもやってくる

」という感覚をどうやって育てていけば良いのかと感じます。女性の人生におけるリスク管理は大事だと思っているので、女性のエンパワーメントで一番重要なのはファイナンシャル・リテラシーだと思っています。

日本語日本文化学科

和田綾子



本学で学ぶ韓国人留学生から「韓国の女子大のキャッチコピーと日本の女子大のそれはなんだか違う気がする」「日本人の学生とはポップカルチャーの話では盛り上がるが、社会での女性の地位の話はでき

ない」と聞きます。それぞれの国の状況が違うというのはわかりつつ、本学の学生と韓国の学生が日韓の問題を「日韓」と対立的に捉えるのではなく、女性が直面する「共有の」問題としてともに考えていってくれたらと思っています。



リレーエッセイ

しなやかなキャリアの重ね方

キャリアセンター長

プロジェクト共同者 前川幸子

「バーナード大学の若い女性の皆さんは、女子大学なので、可愛らしさという型に自分を押し込んだり、自分の意見を押し殺したりする必要がありませんでした。(中略)あなた方はとても特殊な教育を受けた特権を持っています。男女共学で学んだ人とは、また違う明るい将来を思い描き、それに対して全く違った考え方をを用いることができるのです。」これは、約10年前、米国の著名な女優であるメリル・ストリープが、出身校であるバーナード大学(女子大学)で卒業生に向けて贈った言葉である。この言葉が、今、胸を打つのは、現在の女子大学の在り方を読み解く一つの鍵となっているからかもしれない。では、女子大学で学ぶからこそ描くことができる未来とは、どのような景色なのだろうか。

日本における女性の管理職の割合は全体の15%であり(厚生労働省,2018)、諸外国に比して低い水準にある。さらに、政府が掲げた、女性の指導的地位の割合を2020年までに30%にするという目標も到達困難と言われている。しかしながら、我が国の女性を取り巻く環境は、社会進出が困難だった時代から、社会から求められる時代に移行した。これまでの男性中心のリーダー像の代役ではなく、新たな役割を担う女性への期待とその必要性が高まっている。女性は、

人生において結婚、妊娠、育児や介護などにより、幾様にもライフステージを歩む可能性があり、そのキャリアの重ね方はストレイトな道とはならないだろう。これまでの階段を上っていくようなキャリアアップは既に過ぎ去った。多様な価値観と社会の在り様の中で、チャンスを逃さず自己の可能性を見出していく柔軟な思考と機智、そして、周囲に配慮しながら、状況に即した倫理的な判断と、その時々に合わせてしなやかに発揮できる実践力を持つ女性が求められているのではないだろうか。このことは、本学が目指す「未来への実践力」に通じることだろう。

女子大学が向き合うべき課題は、その果たすべき役割を社会のニーズに沿って思考するだけではない。社会における女性の活躍とその推進に向けて、大学から発信していく力を編み出していくことを考えることも、その一つではないだろうか。



前川幸子先生



女性教育カリキュラムの授業やってみた! 「筋骨格障害理学療法Ⅱ」と「健康に生きる」の授業で

理学療法学科 プロジェクト共同者 川村博文

理学療法学科3年次生対象の専門授業「筋骨格障害理学療法Ⅱ」(老人女性に多発する橈骨遠位端骨折について)と、文学部・人文科学部・医療栄養学部生対象の選択授業「健康に生きる」(女性特有の病気)において、女性外来と性差医療ならびにジェンダーと性について言及する授業を実施した。各授業後にアンケートを実施したところ、理学3年次生は女性外来を知らない学生が89.1%(57/64)と多く、性差医療は87.5%が知らないと答えており、一方で、女性外来が必要93.7%、性差医療が必要は93.7%と多く、また、ジェンダーと性の理解はできたが32.8%と少なかった。文・人・栄養学部生では女性外来を知らない学生が81.6%(31/38)と多く、性差医療は92.1%が知らないと答えており、一方で、女性外来が必要84.2%、性差医療が必要は76.3%と多く、また、ジェンダーと性の理解はできたが47.4%と約半数であった。

性差医療の根幹は性差による骨の構造、痛みの感覚、そして薬の代謝や脳の機能などの生物学的、生理学的違いを明確に理解し、遺伝子、性ホルモン、環境などの多くの要因が病態を形成することなどを学び取ることである。そして両性についての理解を深め、より良質の治療・ケアを提供することができるような医療・社会体制を構築することを目指すものである。今回のアンケート結果からは性差医療とジェンダー及び性の理解が不足していることがわかり、さらに性差医療の啓発とジェンダー及び性の理解がえられる工夫がなされるべきだとわかった。



川村博文先生

第3回 本学の女性教育を考える会議(2019年11月20日)を開催しました

プロジェクト代表 野崎志帆

最初に、本学の女性教育のあり方を、1. カリキュラムを通じて女性を応援する学びを提供する、2. 女性を支援する学生生活サポートを提供する、3. 変化の大きい女性の生涯に対応したキャリア支援を行う、の3点から検討することを提案した。参加者に3つのグループに分かれてもらってワールドカフェ方式でアイデアを共有しながら、「甲南女子大学の(なんちゃって)未来ビジョン」を考える場とした。日頃は多忙の中でつい目の前の仕事に気をとられがちだが、時には長期的なビジョンで教職員がともに本学のあり方について自由に楽しく(無責任に)意見交換する時間も大切だと考えたためである。

出てきたアイデアは、例えば1.「経済や政治の知識」「社会人向けのリメディアル教育」、2.「生活・アルバイト相談の場」「学内託児所の設置」、3.「育休取得者のキャリアプログラム」「男子学生・社会人との協働の場」など大いに腑に落ちるもの、「女性営業マン育成講座」「政治塾」など大変ユニークなものもあった。

終始和気あいあいとした雰囲気の意見交換となり、参加者からは「本音で話し合う



アイデアを自由に出し合う教職員の皆さん

ことができ貴重な時間だった。同じ思いの方々がいて心強く思った」「教職員が垣根を超えて意見を言い合うのは非常に刺激的だったし楽しかった」という感想が寄せられた。教職員の皆さまが日頃から学生たちと向き合い、彼女たちのニーズに本学がどう応えるべきか考えておられることがわかり、次のステップに向けて力づけられる機会となった。



2020年2月6日開催 日本女子大学 大沢真知子氏 講演会 「女性のライフコースと仕事 ～女子大学の果たすべき役割とは?」

本学の学生たちが卒業後に就く「仕事」を切り口に、今の女性がどのようなライフコースをたどるのかを理解し、「これからの甲南女子大学のかたち」を考えるヒントを得たいと考えています。奮ってご参加ください。



国立女性教育会館「大学1年の女子大生が読んでおくべき本

後期も国立女性教育会館(NWEC)提供のパッケージ貸し出し図書が届きました。今回のテーマは「女性としごと」。図書館本館2階C階段前木製書架に設置されています。2月の講演会とも関連するテーマですので、その予習・復習に、もちろん学生のキャリア意識の喚起のために、奮ってご利用ください。

これからの〈女性教育〉の話をしよう NEWS LETTER vol.2 2020 Winter

発行日 2020年1月

発行元 甲南女子大学の女性教育の今後を考えるプロジェクト

問い合わせ 代表 野崎志帆

Tel 078-413-3044 e-mail shiho_n@konan-wu.ac.jp